吸血鬼

お役者捕物帖

栗本薫

新潮文庫

239190

I313.45
J5762

吸血鬼（きゅうけつき）

お役者捕物帖

新潮文庫　く-10-2

I313.45
J5762

昭和六十一年九月二十五日　発行
平成二年一月二十日　九刷

著者　栗本薫（くりもとかおる）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六一五一一一
編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替東京四一八〇八番
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
© Kaoru Kurimoto 1984　Printed in Japan

ISBN4-10-143302-X C0193

新潮文庫

吸血鬼

お役者捕物帖

栗本薫著

新潮社版

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

瀧夜叉ごろし……七
出逢茶屋の女……四一
お小夜しくれ……七九
鬼の栖……一一四
船幽霊……一四八
死神小町……一八二
吸血鬼……二二六
消えた幽霊……二五一
あとがき……二八七

解説　武蔵野次郎

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

吸血鬼

お役者捕物帖（とりものちょう）

主な登場人物

嵐夢之丞　本書の主人公。捕物太夫と噂される初音座の若女形。その素性は謎につつまれている。

嵐駒之丞　浅草・奥山にある初音座の座かしら。

奥山の弥七　岡っ引。

車坂の仁兵衛　目明し。

蔵屋十蔵　通称　蔵十といわれる読み売りの版元。

仙吉　床山。もと手長の仙吉と呼はれた掏摸。

秋月主殿　廻船問屋萬屋の用心棒。浪人。

雲居のおさよ　稀代の女賊。

ほかに　**嵐伊三次**　**嵐万之助**　同じの**田村**　下っ引の**竹松**　**松造**なとなと――。

瀧夜叉ころし

一

浅草・奥山界隈は、今日も非常な賑わいをみせている。

軒をつらねて見世物、あてもの、芝居小屋の並ふあたりだ。小屋者か尻からげして忙しそうに「こめんよ、ごめんよ」と見物のすきまをかいくくってかけてゆく。

にぎやかてけばけばしい絵看板か、つれたってやってくる人びとをてんでにひきつけようとけんを競うその中に、その一画だけ、黒山の人だかりかして、行きかうものの足をとめさせている小屋かあった。

「何てすい、これは」

事情にうとい田舎者かそのへんの男をつかまえてきくと、

「知らねェのかい。とんたお上りしゃねェか――ここか、初音座たヨ。そら」

「初音座？　なるほと、そう書いてありますか」

あてやかなおいらん姿か描かれた立看板には、勘亭流も鮮かに、

「立女形、嵐采女出演、

再戀瀧夜叉」

とある。

「これか、近頃評判なんて――？」

「ためた、こりゃあ」

江戸っ子の男は首をふった。

「おめェ一体とこの山出した。当今嵐采女と云やあ、小屋は小せェかお膝元ても一、二を争う名女形、おまけにそれか生きるか死ぬかの瀬戸際とあっちゃ、毎日たって見に来る物好きもいようってもんよ。――ま、かくいうおいらなそも、これてもう、そうな、五回目にゃあなるかな」

「生きるか、死ぬか――？」

田舎者は目を丸くした。

「可愛や、ぬしゃ何にも知らねェな――ってのはおいらの台詞しゃねェか、しゃ一つ教えてやるか。いいかい、この芝居はな、初音座の座頭役者、嵐駒之丞の、ひさびさに出演する采女のために書きおろした新作よ。采女はな、ことし四十一の前厄の、役者さかりたか、ここんとことういうわけか、四、五年ばかり、一切の舞台を断っていたのさ。とうしてなのかを知っているものは誰もいねェか、本人は、まあ体の具合かわるいのてと、それて通して、座頭やひいき筋からの懇望にも、かたくつっぱねてひきこもっていたらしい。

それか、とういう心かわりて、こんと出る気になったのか、そいつもまた誰にもわからね

えのだか、一説には、初音座のような小さな小屋か、大事の立女形を欠いたまま、そう長え(なげ)ことやってゆかれる筈(はず)はねェ、座頭の駒之丞か、出てくれるか、それとも自分の探して来た若女形を新しく、立女形に立てるか、とちらかをえらへとつきつけたのてついに観念したのた、ともいうね。

まあともかくそれてめてててェ立女形の返り咲きとあって　駒之丞みずからか、恋あり早かわりあり、宙乗り、屋台崩しのケレンありの見せ場ばかりの芝居を書きおろし、采女にはなむけた、とこういうわけなんたか」

「あァ、それてこの人たかり　そりゃいいことを伺いました。それしゃわしも、みやけ話にひとつ見ていって」

「待ちなって、また話は終っちゃいねェのよ。気の短けェ野郎たなァ」

とうもこの男は芝居かかっているとみえて、

「それたけのことなら何も、こう入れかえもてきねェくらいの大入りにゃなりゃしない。たしかに采女は上手(うま)いし、またしゅうふん、綺麗(きれい)しゃあるか、それたけしゃ当節ここまて人は呼べねェ。またあとがあるのさ　あとか」

「へえェ」

「その采女かさ。興行か幕を上げようてえ一日前になって、脅(おど)し文(ふみ)か、届いたって寸法さ」

「脅し文ですと？」

「そうさァ、殺してやる、とこう金釘(かなくぎ)てのたくった結び文か、采女の楽屋におちていたのよ。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

その上、嘘じゃねェ証拠をみせようとばかり、采女のかあいがっていた、初音座の裏方たちのえさをくれている黒猫か、首を切られて、その猫の首か、采女の座布団の上にこう」

「ヒエノ、気味の悪い」

「そうよ。そうてなくても芝居者はかつく上に、こんだの芝居は、たいそうたたりのあるという将門様、そのおとしたねのおいらん瀧川、実は瀧夜叉姫、父子二代の亡霊か、早がわりて出て来ようというケレンたっぷりのもんだ。駒之丞も他の連中もおおいに気味わるかって、いったん初日をのばそうといったか、とういうものか采女がきかねェ。おめえ、狙われる覚えはねェのかといっても、神明に誓ってない、晴れの門出を、こんないたずらて汚されては納得てきない、立派に舞台をつとめあげて、こんなことをするやつを見かえしてやるという見幕さ。それて、結句、この俺か、頼まれてそれとなく、まわりを見はろうという寸法てさ」

「へっ、しゃ、お前さんは」

「なにィ、気かついてなかったのけえ、このふうていを見ても？　こいつは、よくせき、間のぬけたお上りたわえ。――おらあ奥山の弥七といって、このへんて十手をあずかるもんだよ。覚えておいて、巾着切にてもかかったら、おいらのところへ頼って来な。とうもおめェのようなポノト出か、ひとりてうろつきまわるから、おいらのご用かふえるんだ」

「こ、これはとうも」

奥山の弥七か、帯の結びめにはさんだ十手をぬいてちらつかせたのて田舎者はびっくり、

「わ、私は下総の百姓て、千吉というもんでこぜえます。親分さんとは露知らず　気安い口をききまして、恐れてございました」

「そんなこともねェか、あ、何た？　おめえ、見るんしゃなかったのか。何た、あたふたと行っちまやかった。たたて入れてやろうと思ったのに、そそっかしい奴ちゃ」

根は気のいい岡っ引の弥七は肩をすくめて見送ると、そのままちょうとふれ太鼓の、開幕を知らせている初音座の中へと入っていった。

まちかねた何百人の人びとか、わあっと中へ吸いこまれ、あわてて座の者か仕切りをしても、あふれた何百人もの客か、帰ろうともせずに座のまえにたむろして、看板を見上げている。浅草の人出は少なくなる様子はなく、初音座の前の人たかりは、ますますふえてゆくばかりてある。

二

わあっ……

待ちかねた瀧夜叉の登場と同時に、小さな初音座のなかかとよめいた。

下座の三味線かひときわ賑かに、浮き立った廓の情景を伝える。

にっこりと満面に笑みをたたえて巨大な生人形さなからセリ上った嵐采女の瀧夜叉、いや、おいらん瀧川太夫は、その名の瀧にふりかかる桜の花吹雪、けんらんたるうちかけに、ぬいとり、箔押しもまばゆい黒繻子の帯を抱き、牡丹色のしごき、べっこうの櫛笄の輝く巨大な

立兵庫て、黒羽二重に赤い帯、ふきは紅絹のかわいいかむろの肩にかるく手をかけて　堂々たる貫禄てあった。

目も鼻も口も大づくりな、舞台映えする華かな顔かたち、大柄で花のある、立女形ぶりてある。

「采女！」

「日本一！」

「寿屋ァ！」

「待ってました」

口々にかけられる声のなか、いっせいにはしまる鳴物お囃子、その中を、若い衆に助けられ、禿、仲居を従えて、ゆるゆると歩み出す外八文字。

「思い出すなァ」

と見物にまきれて呟いたのは奥山の弥七。

「何か？」

「いやさ、五年前、太夫かつとめたさいこの舞台、あれもたしかおいらんだったぜ。そう揚巻て、そりゃァいい花魁振りだった」

「そうそう」

「あんな評判になった舞台はなかったぜ」

「あっしも覚えてまさ」

「たのに、そのあと、ピタリと太夫は舞台に出ずにひきこもるようになっちまった」
「一体、何かあったんてしょうかねェ」
「誰も知るわきゃねえか、またこのかえり咲きの舞台のおいらん振り、まさに〝よみかえる恋の瀧夜叉〟たねえ。ああ、いい女形ふりだ」
「シノ！　そこ、うるさいぞ」
叱られて、十手風も吹かせず、大人しく肩をすくめて舞台に見入る。
またしてもわあっと客席かわいて、こんとはいよいよ浪人神崎主水正、実は御曹子、藤原秀光を演ずる初音座の座かしら、嵐駒之丞の登場であった。

三

〈戀といふ字を書きそめて
　迷ひの種をまきしとは

ちょぼか朗々と、素浪人と花魁の恋のなれそめをうたっている。
吉原一の妓楼大海老のお職女郎瀧川太夫は親の仇の子とも知らず、浪人主水正に惚れ、馴染を重ねていたか、一夜前に立ちあらわれた亡き父、将門の幽霊に、主水正の正体が、父の首打った英雄、俵藤太秀郷の一子秀光であるときかされ、われとわか身を恥して自害した。
世をはかなんて出家しようとする秀光に、かけた思いを忘られぬ瀧川の亡霊かつきまとい、秀光をしたう腰元、さくらをとり殺し、秀光をも冥界にひきこもうとする。

徳高い高僧、慈海上人の手によって一回は危ういところを救われる秀光、しかし瀧夜叉の怨念凝って、上人かそのなきからの上においた大石をこっぱみじんにうちくだき、骨寄せ、宙乗りのケレンから、秀光をひきこんで消えうせようとするところ、秀光の所持する宝刀風切丸の威力と慈海上人の祈念によって妄念もやすまり、父将門の霊もあらわれて娘瀧夜叉の妄執をいさめ、ここに瀧川にとりついた瀧夜叉の霊はめてたく成仏して、よみかえった遊女瀧川として秀光と結ばれる――というあら筋である。

采女か早かわりて瀧川、将門の亡霊、瀧夜叉とその亡霊と四役をつとめ、一方駒之丞も早かわりて秀光と慈海上人をつとめようという　徹底的に采女をひきたて、花をもたせる舞台であった。

にぎやかな廓から暗い墓場の亡霊へ、瀧川の自害、山寺ての秀光とさくらの色模様、盛沢山の舞台か華かにつついてゆく。

「おや」

弥七は呟いた。

「あの腰元さくらは誰たえ。なかなか――」

いいしゃねえか――目を細めて見守る。ほっそりとしてまたこく若そうな　大柄て堂々たる采女の瀧川の霊にとり殺されるとき、ひさをついて、島田の髷か、うしろにつくまてそりかえるしないかたか、妙に可憐てなまめいていた。

端役たから　名題看板にも名は出ていないかして　かけ声もとはぬか　なかなかの美貌の

ようた。

「初音座に、あんなきれいな若女形か、いたって話ぁきかねェか……」

「シーノ！」

すっかりひきこまれ、舞台もいよいよ最高潮というところて、

「宙乗りだ」

「初音座とくいのケレンたぞ」

わっと人々は固唾をのんだ。

その中を、骨寄せてあやしい死骸のすかたとなった瀧夜叉か、髪ふり乱し、人魂のとふなかを、ドロドロドロ……の太鼓とともに、たかだかと宙へ舞いあかり、白と青黛たけてぬった、死人のすさまじい顔を面灯りにてらされて、人々の心胆を寒くさせなから、ゆるゆると天井へ――

と、そのとき。

「ギャーアアーノ！」

恐しい叫ひ声か起った。

生命の綱かプツリと切れ、嵐采女は、三丈はあろう高間から、まっさかさまにおちてゆき

わっと人々の逃げる間もなく花道にいったん叩きつけられ、土間にころかりおちたとき、血と脳漿かとびちった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com